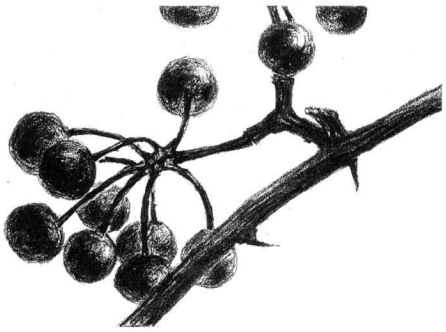
朝日歌壇 俳壇



〈サンキライVII〉　日高理恵子

高野公彦選

十一月三日は夏日だったけど三週間後の今日は初雪　（福島市）安斎真貴子

神さまもう許してあげてプリズンで閉じかに歌詠む郷さん想う　（三鷹市）大谷トミ子

歌により罪赦さるる説話読み郷氏を思ふ叶はぬ願ひか　（朝霞市）岩部　博道

「郷隼人」さんの名前に安堵してガザ、ウクライナへ視線を移す（近江八幡市）寺下　吉則

駆け込んで柿まるのまま丸齧る女の若さ乗せバスは行く　（スイス）岸本真理子

山からは五キロ離れた我が家でも柿の木二本あれば恐ろし　（五所川原市）戸沢大二郎

揃えてたトイレのスリッパ駆け足の形に変わる孫の来た午後　（松山市）矢野　絹代

MRIの中でも歌を詠むことはできると知った晩秋　（奈良市）山添　聖子

法要に伯父が残した日記読むかすれた文字のラーゲリの日々　（安芸高田市）安芸　深志

「エンディング」「終の」「一人の」我の今日借りて帰りし本の背表紙　（松山市）宇都宮朋子

【評】一首目、あっと言うまに過ぎ去った今年の秋をリアルに表現。二首目～四首目、今回は久びさの郷隼人さんの歌壇復帰（11月26日）を喜ぶ歌がたくさん寄せられ、これはその中の三首。五首目、柿はスイスでも賞味されているらしい。

永田和宏選

寝がえれば温みがそこにあるはずの夢の続きをまたも見ている　（焼津市）野沢たか子

八十年前にはありき招集が召集だった暗き時代が　（観音寺市）篠原　俊則

民衆は殺し合わない　戦場で国に強制されない限り　（東京都）十亀　弘史

大型で非常に強い勢力の軍国主義が接近中です　（東京都）冨永　清美

人はみな己が逝きし日知らぬもの文明忌来るこれ開戦日　（大和郡山市）四方　護

冬眠中に建設工事の始まった亀の気持ちのMRI　（奈良市）山添　聖子

心からいちばん遠くにある髪の毛先ばかりを気にする少女　（新潟市）野澤　千恵

ブランコは巻き上げられて公園は雪捨て場となる春まで眠れ　（札幌市）橘　晃弘

木曜日アップルパイを君に焼く甘さ控えめ愛は重めで　（大阪市）菅波　麻子

住吉は和歌の神ですこの名前筆名みたいとよく言われます　（札幌市）住吉和歌子

【評】野沢さん、寝返れば常にそこにあった筈の温もりが、今はもう……。篠原さん、招くと召すの違いは大きい。招かれても行きたくはないが。十亀さん、あまりにも当たり前の事実、かつ真実。冨永さん、実感として感じている人も多い筈。

馬場あき子選

クルド人在留許可が少し下りる許可出ぬ家庭と溝は深まる　（朝霞市）青垣　進

暮れなずむ畑の鹿は竹林に翔びて真白き尻毛残せり　（沼津市）東川　勝範

袴田さんの確かな筆跡崩れゆく長き独房暮らしの果てに　（鹿嶋市）大熊佳世子

畑の上明るき空に白き雲鷹柱見ゆ風は希望か　（岐阜市）後藤　進

立札に「猫捨てるな」のその下でゴドーを待ってる三毛と茶トラは（名古屋市）磯前　睦子

「樹木葬、散骨できます」寂れゆくこのふるさとのための折り込み（観音寺市）篠原　俊則

かすかにも紅葉ふむ音させて寄る雀とパンを分かつしあわせ　（西宮市）澤瀉　和子

スマホから作る料理がおもしろい生きる八十路に彩副える　（鴻巣市）今井　君枝

ギンナンを一粒一粒殻を割り強飯炊けば秋は翡翠色　（須賀川市）近内志津子

渡り手をはじめてほめられた帰り駅で苺のアイスを食べる　（奈良市）山添　葵

【評】第一首、日本で暮らすクルド人は難民として在留が認められるのを待っている。ごく一部に許可が出たことによって平等感が薄れる悲しみを見守る。第二首、真白き尻毛が印象的で可憐。第三首、袴田さんへの思いが多く寄せられていた。

佐佐木幸綱選

ガザをうつすテレビは無臭　戦争は無臭ではない、無臭ではない　（川崎市）小暮　里紗

屋根を打つ霰の音よ夕暮れの道は見る間に白くなりたり　（秋田市）佐々木義幸

寒空にせっせと通うキャンプ場子よ熊避けの鈴は下げたね　（高槻市）藤本恵理子

カラマツの落葉は窓にも湯舟にも帰りの車のシートにも散る　（南相馬市）水野　文緒

腹からの競りの声響きカンパチが箱をはみ出す土佐清水港　（熊本市）田川　清

縄跳びに初めて挑む幼子はこぶし握りて歯をくいしばる　（久喜市）白石　由紀

湖東まで来て彦根城遠くから眺めて帰る弾丸ツアー　（横浜市）杉本　恭子

マフラーを初めて買った沖縄の友はハチ公前でスキップ　（日田市）石井かおり

剪定終え樹形かわりし庭木々の整然として木枯しに立つ　（高松市）塩本　宏子

壁叩き妻が二階へ合図する夫は床蹴り食事の交信　（習志野市）元杉　紀雄

【評】第一首、戦場を映すテレビ映像と実際の現場の決定的な差異は臭気だという。鋭い。第二首、作者が住む秋田市にいよいよやってきた冬本番である。第三首、今年のキャンプには熊対策が必須。下句、呼びかけの口語をうまく採用した。

俳句時評　澤好摩の美しい抒情

阪西　敦子

7月に客死した俳人・澤好摩を偲ぶ会が11月4日に都内で催された。

1944年生まれの澤は、63年に東洋大学に入学して作句を開始。在学中に坪内稔典と出会い、その縁から68年に大阪へ居を移す。69年に坪内らと同人誌「日時計」を創刊。その後も複数の同人誌の創刊に関わった。仲間を求め、人と人とをつないだ人だ。帰京後、前衛俳句の旗手・高柳重信が編集長の「俳句研究」の編集助手をつとめ、変化していく俳句の動きや新たな作家の登場に立ち会ってきた。折々に出会った人々が偲ぶ会に集い、句業と広やかな人柄が語られた。

参加者には、澤を顕彰した2冊の俳誌が献呈された。一冊は、澤が最後に創刊し、死の直前まで作品を発表した「円錐」。旺盛な活動と交流を克明に記す年譜や、19人の追悼文が掲載された。「人間存在のかなしびや孤心、そこから発する人懐かしさとでも言うような美しい抒情」という澤の同志である味元昭次の証言は、澤が目指したものを言い当てている。もう一冊の「翻車魚」では2014年に芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した『光源』を含む既刊の句集と、それ以外の句から「澤好摩の百句」を高山れおなが選・鑑賞している。

〈曇天へ馬駆け込めり桃の花〉は、馬が好きだった澤がその躍動を詩情豊かに描いた句。〈寒雲に片腕上げて服を着る〉は、服を着ることがもたらす雲と人の接近が新鮮だ。〈折紙をひろげて皺の日永かな〉は、皺に宿る時間を愛おしむようだ。長く広い句業を展望する、さらなる顕彰と継承を待ちたい。（俳人）

◆31日の歌壇俳壇面は休載します。1月1日の文化面で8選者の「新春詠」を掲載します。

風信

第6回笹井宏之賞　書肆侃侃房主催。大賞は白野さんの「名札の裏」（50首）に決まった。副賞として歌集が出版される。

大辻隆弘著『岡井隆の百首』　歌誌「未来」の編集発行人を岡井隆から引き継いだ著者による一冊。30冊超の歌集から100首を選び、鑑賞とともに紹介。歌風の変遷の解説や年譜も巻末に収めた。（ふらんす堂・1870円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。